

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動報告 第4回派遣(2011/1/16~22)

アパリは、平成21年度よりJICA(国際協力機構)の草の根技術協力事業として、マニラ市の貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業を展開しています。

3年間のプロジェクトの2年目で、今回は4回目の派遣になります。派遣メンバーは近藤、三浦、山本、古藤、志立でした。それに加え日本ダルク アウェイクニングハウスから猿渡、ダルク女性ハウスから瓜生、京都ダルクから加藤、沖縄ダルクから森、そして沖縄ダルクの入寮生3名が同行しました。今回はJICAでアパリの担当をしている高橋氏も同行しました。更にNHKの取材も入る予定でしたが、スケジュールの関係で延期になりました。

今回の渡航では、現在タタロンで行われているARMミーティングを視察し、そこでダルクのプログラムで行われている琉球太鼓を披露したり、現地の人との交流を図ってきました。また、ARMミーティングは現在1ヶ所のみ開催していますが、今後開催場所を増やすためにその候補地となるところの視察もしてきました。

次回の渡航は5月頃を予定しています。



JICAフィリピン事務所にまずはご挨拶。滞在中のスケジュール、進捗状況等の確認を行いました。

<第4回渡航スケジュール>

1/17(月): JICAフィリピン事務所訪問、ファミリー・ウェルネス・センターにて打合せ

1/18(火): 近藤恒夫のレクチャー

1/19(水): タタロンのARMミーティング視察、琉球太鼓の演舞、参加者へのインタビュー

1/20(木)午前: 保健省訪問 午後: 教会Hope for the World訪問(琉球太鼓)、教会近くの施設を訪問(琉球太鼓)

1/21(金): MADAC(Makati Anti Drug Abuse Council)訪問



ファミリー・ウェルネス・センター(FWC)のオフィスにて打合せ



近藤恒夫のレクチャー
FWC代表リッチー氏の姉のオフィスにて



マニラのNA会場
お洒落なカフェに集まり、仕事の前にミーティングをします。

写真報告集

タタロンラーニングセンターで行われたARMミーティングの様子。今回は日本から大勢参加したので、総勢30名位になりました。ファシリテーターはコアメンバーのガブリエル氏です。



移動のバスの中。リッチー氏がバスガイド役を務めていました。



ARMミーティングが終わった後、沖縄ダルクと日本ダルクアウェイクニングハウスのメンバーによる琉球太鼓の演舞がありました。ドシャ降りに見舞われ、急遽隣の部屋に移動しました。このスペースで5名叩くのは大変そうでした。



タタロンラーニングセンターでは普段、子供たちに学習の場を提供したり、薬物乱用等の予防教育を行っています。



【事業概要】

事業名: マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業

事業の目的: マニラの貧困層に薬物依存症者のためのミーティングが開催される環境が整う

対象地域: フィリピン マニラ市の貧困層地域

活動及び成果:

- 1、本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。
- 2、コアメンバーの本邦研修により、ミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。
- 3、現地でミーティングを開催し、地域で薬物依存症についての理解とミーティングに対する理解を深める。
- 4、ミーティングの際に使用するハンドブックを作成する。

実施期間: 2009年5月～2012年3月(約3年)

カウンターパート: ファミリー・ウェルネス・センター = FWC(マニラ)

協力機関: タタロンラーニングセンター(タタロン)



フィリピン保健省を訪ねる前に記念撮影。後ろの建物が保健省。



フィリピン保健省、アパリ、FWC、JICAとの合同会議。セブ島で薬物使用者のHIV感染が広がっている。政府はこれを何とかしなければと思っている。ぜひ力を貸して欲しいという話がありました。



ARMミーティング会場の候補地にあがっている教会「Hope for the World」にて。ここでは週に1回子供たちのプログラムを行い、その後に給食も提供しています。ここでも琉球太鼓を披露し、子供たちは大喜びでした。

村の風景



教会を訪問した後にPaje牧師から、近くに見て欲しい施設があると言われ、バスに揺られ約1時間走って着いた所は、山の中の貧しい村でした。公民館のような子供たちに勉強を教える場所に連れて行かれると、100名近くの子供や村人が集まり、私たち一行を大歓迎してくれました。そこでも琉球太鼓を見たいというリクエストがあり、先ほど叩いたばかりだったのですが、メンバーたちは最後の力を振り絞り、太鼓を披露しました。まるで日本からヒーローが来たかのように割れんばかりの拍手を受け、子供たちから握手を求められたり、喜んでいる子供たちの笑顔が印象的でした。



MADAC (Makati Anti Drug Abuse Council) を訪問しました。マカティ市で薬物事犯で捕まるところに連れて来られ、回復チームがアセスメントを行い、入寮、通所のリハビリに分けられます。通所者はMADACの施設内でプログラムを6ヶ月受け、その後18ヶ月のアフターケアに入ります。現在100名以上の対象者がいます。こちらもARMミーティング会場の候補地になっています。この会議の中で、市長も期待しているのですぐにでも話を進めたいと、とても好意的でした。また、将来的に日本に研修に行くことは可能かと質問を受けました。

沖縄ダルク入寮生の体験談 「一体感」・・・ サトル

初めての海外ということもあり、かなり気持ちが高揚していました。フィリピンのイメージとしてはバナナとか一時期流行したフィリピンパブのイメージしかなく、漠然としたまま出発の日を迎えたのですが、飛行機を台湾で乗り継ぎ段々日本語が周りからなくなってくると、今までの人生で感じたことのない類の不思議な気持ちになりました。自分にとって初めてのこととか、新鮮な場所というのが気分を変える良い刺激でいい気付きがあるかなあと期待に胸を膨らませながら空港に着きました。

気温は真冬だというのに25 以上あり、みんな半そでに短パンにビーチサンダルなので少し沖縄みたいだと感じました。基本の言語はタガログ語が主流で、共通言語は英語で、たまにスペイン語を話せる人もいたりとか。日本との関わりも多い国だから少しだけ日本語を話せる人たちもいるようでした。フィリピンで今、NAミーティングや回復プログラムが進んでいるのは、マニラの中心地の豊かな生活を送っている人たちがほとんどで、実際田舎の街では飢えをしのぐ為に子供たちが食料よりも安いシンナーを吸っていたり、その流れで日本でも多い覚せい剤がシャブという日本と同じ名称で出回っていて、ポピュラーな感じだということには驚きました。なんか街に着いて初めて感じたのは、みんな彫りの深い浅黒い顔をしていて、忙しく動き回っていて車もクラクションを鳴らしっぱなしだったり、対向車線に堂々と駐車している車があったり道路交通法とかはないのかなと思うくらいせわしく、何かほとんどアディクトみたいな動きをしているなあと圧倒されました。

自分たちが行った目的として貧困層に焦点を当てたミーティングプログラムの見学、また山の中の村のようなところと教会で太鼓を叩きました。話で聞いていたとおり、街の中はゴミだらけ、皆やせていて裕福とはいえない街でした。ミーティングでの話を聞くと、大人はシャブやお酒を飲んでいたり、幼い子どもでもシンナーやシャブを覚えて苦しんでいるようでした。でもエイサーを叩くと興味津々で最後のカチャーシーでは総立ちになって音楽が終わるまで踊り続けてくれました。「こんなに盛り上がってくれて本当にありがとう」って一体感を味わえました。夢中になって太鼓を叩く子供たちの姿を見て、こんな天使のような笑顔の子どもが薬や犯罪に手を染めてドロップアウトしていくのは本当に悲しいことだと本心から思えました。こんなにかわいい子ども達の将来が明るい未来でありますようにと心の底から願えました。藤岡のダルクの仲間と一緒にエイサーを叩かせてもらってとても良い刺激になりました。言葉では上手く伝わらないもの「薬物を止めたい」という思いは十分に伝わったと思います。満足感と感謝に包まれた時間でした。アディクションに関する会議に出席しフィリピンの仲間とフェローシップをとり、太鼓を叩いてあっという間の濃密な5泊6日の旅でした。このような体験をさせて頂いた事にダルクとフィリピン研修を援助してくれた両親に心から感謝をしています。

沖縄ダルク入寮生3名が参加し、そのうちの1名の体験談を掲載しました。沖縄ダルクのニューズレターから転載しています。